

南海トラフ地震に備えた 防潮林づくり マツ林から広葉樹林へ



東海地方でも、津波からいのちを守る森づくりが始まりました。

三重県明和町大淀海岸では、南海トラフ地震など津波を伴う大規模地震発生で、2~10mの浸水が予測されている地域です。また、マツ林(海岸保全林)が整備されているこの海岸線は、マツクイムシによる枯れ被害に悩まされており、疎林化が進んでいました。

そこで明和町では、東日本大震災の教訓を活かす当プロジェクトの森づくりを取り入れ、津波の防災・減災対策とマツ枯れ対策にもなる、広葉樹を中心とした森づくりの取組みをはじめました。

既存のマツ林を活かした、森の防潮堤づくり

疎林スポット(黄色い部分)に盛土

マツクイムシ被害により疎林となったスポットに、高さ1.5mほどの盛土をする。水はけを良くし、根腐れを防ぐ。また、地中深く張った木の根は津波に倒れることなく、津波の威力を弱め、水位も低下させる。

常緑広葉樹を混植・密植

その土地本来の常緑広葉樹など十数種類を混合し、1平米あたり3本の密度を基本に植える。

次世代に嬉しい管理コスト

植樹から約3年間は草抜きメンテナンスをする。その後は天然更新する森となり、メンテナンスを必要としない。

次世代を津波から守る

広葉樹を中心とした森が津波の威力を弱め、漂流物も食い止める。また、マツクイムシ被害にも強い。

